

大豆情報

No. 2

えちご中越農業協同組合
TEL0258 (41) 2887

令和 7年 6月20日

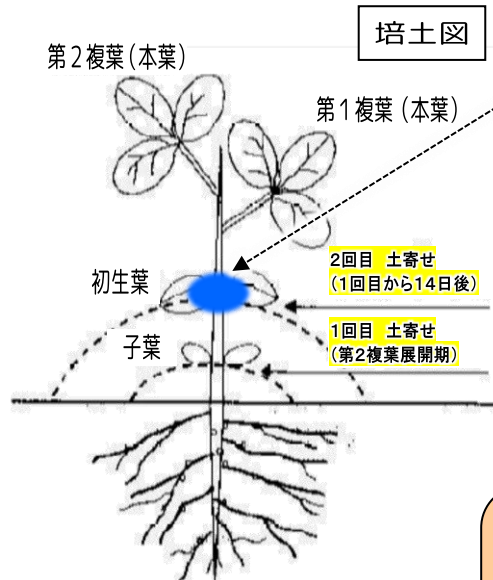
本県の梅雨入りは平年並みの6月10日となりました！

- 5月の日照時間が平年と比較して短かったことから、ほ場の乾きが遅れ、播種開始は遅れる傾向にありましたが、出芽・苗立ちは概ね“良好”となっています。
- 現在の生育は、管内の早いほ場で第1複葉展開位となっています。ほ場毎に生育状況を確認し、培土が実施できるほ場は晴れ間を見て速やかに行いましょう。

1. 中耕・培土

☆中耕・培土の目的(効果)

- ① 土壌の通気性や排水性を高めます。
- ② 培土した部分にうね根を発生させ、倒伏を防止するとともに、根粒菌の活性増大を図ります。
- ③ 雑草を抑制します。



	作業適期	培土の高さ
1回目	第2本葉展開期頃 (播種後20～25日) 主茎長12～15cm	子葉節まで
2回目	第5本葉展開期頃 1回目培土の約14日後 主茎長(地際から)20～30cm	初生葉節まで 畝の高さ15cm

確実に2回
実施!!

作業のポイント

- ① 株元まで確実に土寄せできるように、培土機を調整します。
※土寄せが不十分で株元がへこむと水が溜まり、湿・病害の原因になります。
- ② “極端に雑草の発生が多いとき”（播種後の除草剤が未散布の場合）や“連続降雨が予想されるとき”は生育量が小さくても早めに培土作業を実施しましょう。
- ③ 2回目培土終了後の畝高は、収穫時の土のかき込み防止（汚損粒防止）のため、15cm程度までとします。特に、畝立て播種の場合は、畝が高くなりやすいので注意しましょう。
- ④ 開花期以降は、断根による生育抑制や落花・落莢を招く恐れがあるため、培土作業は開花期までに完了します。

- ① 1回目の培土が遅れると2回目が開花期までに完了しない恐れがあるので、遅れずに実施しましょう！
- ② ほ場内に停滞水があると、湿害によって立枯病害（立枯病・茎枯病・黒根腐病）の発生を助長し、収量・品質の低下を招きます。有効な薬剤はありませんので、必ず排水対策を徹底しましょう！

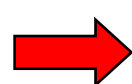
2. 梅雨時期の排水対策

- ① 基本は暗渠栓を開放します。

開花期以降は…

開花期～粒肥大期は、最も多くの水分を必要とする時期です。開花期以降（平年：7月20日頃）に梅雨明け発表されたら暗渠栓を閉め、土壌水分の維持に努めて下さい。（雨が降ったときのみ開放します）

- ② 降雨による地表水が速やかに排水されるよう、培土後の溝（うね間）は明渠や排水溝に連結します。



明渠は必ず連結しましょう！



排水路

- ③ 大雨の後、安全を確認したうえで排水路やほ場内の排水溝の整備・点検を行いましょう。

3. 雑草対策

大豆生育期の雑草防除は、適期の“中耕・培土”が基本です！



- ☆ 畦間雑草は、収穫作業に支障をきたすだけでなく“汚損粒”の原因になります。
雑草が大きくなる前に“中耕・培土”を完了し、雑草を抑制しましょう！
- ☆ 砕土率の低いほ場は、雑草の取りこぼしが懸念されます。培土で抑草できない場合には、除草剤を散布した後、1回目の培土を実施しましょう！
- ☆ 降雨により中耕・培土作業ができないほ場については、早期に生育期処理除草剤を散布し、雑草の大型化防止に努めましょう！

区分	薬剤名	使用時期	草種	10a使用量	希釈水量
全面処理	ポルトフロアブル	雑草生育期～ 収穫30日前まで	1年生雑草 (イネ科)	200～300ml	50～100ℓ
	ワンサイドP乳剤	雑草生育期～ 収穫60日前まで	1年生雑草 (イネ科)	75～100ml	25～100ℓ
	大豆バサグラン液剤	だいた2葉期～ 開花前まで	1年生雑草 (イネ科除く)	100～150ml	100ℓ
畦間処理	ラウンドアップマックスロード	収穫前日まで	1年生雑草	200～500ml	50～100ℓ
	タッチ ダウンIQ	雑草葉面散布 収穫前日まで	1年生雑草	250～500ml	25～50ℓ
	茎葉塗布	着莢期以降～ 収穫7日前まで	1年生 広葉雑草	500ml	500ml (2倍液)
	バスタ液剤	収穫28日前まで	1年生雑草	300～500ml	100～150ℓ
土壌散布	ザクサ液剤	収穫28日前まで	1年生雑草	300～500ml	100～150ℓ
	ダイロンゾル	だいた5葉期～ 収穫30日前まで	1年生雑草	100～200ml	100ℓ

※ 畦間処理する場合は、大豆や周辺ほ場に飛散しないよう十分注意して下さい。（飛散防止カバーを必ず使用）

※ 難防除雑草（帰化アサガオ類、ツユクサ類、アレチウリ、イヌホウズキ）⇒見つけしだい除去してください。

〔時期別生育量の目安〕

大豆の生育量が小さいと、条間が大豆葉で被覆されるまで時間がかかり、雑草害による収量・品質低下が懸念されます。播種後40～50日に主茎長を調査して、基準より小さい場合は、中耕作業を追加するか生育期除草剤を散布する等、早期に雑草対策を実施しましょう。

播種後日数	標準播 (5月末播種)	晩播 (6月播種)
30日	—	19cm
40日	23cm	33cm
50日	38cm	—

4. 追肥

ほ場の“地力低下”から、「しわ粒（ちりめんじわ）」による格落ちが増加するとともに、小粒化・収量減少の傾向が進んでいます。低地力ほ場では追肥を実施しましょう！

- ★ 地力の低いほ場（砂壤土、有機物・粘土質が少ないほ場等）
⇒ ちりめんじわ粒の発生軽減と増収を図るため、2回目の中耕・培土時（7月10日頃）に「緩効性肥料」を施用しましょう。

- ★ 湿害による黄化や大雨により一時的に湛水状態となった場合
⇒ 排水が完了した後に「速効性肥料」を施用しましょう。

※ 施肥量が多すぎると根粒菌の活性が落ちるので注意して下さい。

ほ場条件や生育状況により、追肥資材を使い分けてください！



区分	資材名	施用量	施用方法
緩効性肥料	被覆尿素 LPコートS60	15kg/10a	2回目の中耕・培土前に緩効性窒素成分で10a当たり6kgをうね間に施してから、培土します。
速効性肥料	尿素46	4～6kg/10a	排水が完了した後に速効性窒素成分で10a当たり2～3kgを施肥します。

～～営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ～～